

マザーの言葉受け継ぐ

10周年記念
トークショー
アグネスさんら語り合い



左から千葉さん、アグネスさん、山本さん＝9月5日

9月5日、マザー・テレサの帰天10周年を記念し、東京写真美術館（東京都目黒区）ホールで、映画上映と座談会「実践する愛―マザー・テレサの言葉を継ぐ」が行われた。

同日、上映された映画「マザー・テレサとその世界」（1978年）を制作した千葉茂樹監督、日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさん、東京の山谷地区でホスピスケア施設「きぼうのい

マザー・テレサ26の愛の言葉」（主婦と生活社）出版の経緯を紹介した。アグネスさんにとってマザーは、「暗闇の光。永久への道のりであり、わたしのエンジェル」だという。アグネスさんは「できるだけその精神に近づきたい」と85年にエチオピアへ渡り、ユニセフ協会大使として活動を続けている。

76年に初めてマザーに会ったという千葉さんは、マザーの訃報を知った翌日、足立区のミッシェル・ヨナリス・オブ・チャリティ（神の愛の宣教師会）に駆けつけた。

3度来日を果たしたマザーが特に強調したのは、「日本は豊かになっただが、お腹の子どもを中絶している国。そのような国が果たして豊かな国なのだろうか。日本人は心の貧しい人たちらす」とのメッセージだったと千葉さんはいう。「わたしたちは貧しさというと、何か遠いアフリカを想像するが、自分の家庭にもあり得る、まったく声にならない命をどう考えているのかという問題を突きつけた。マザーは愛というものが自分の中に本当に生きているのか、ということを問うけた」。

カトリック信徒である山本さんは、山谷で末期